

北の大地から

佐藤 朋子

平成10年度「地理学野外調査」として、私達は7月27日から31日まで青森県上北郡六ヶ所村を訪ねた。下北半島のつけ根に位置する六ヶ所村は、面積250km²、人口約12,000人、広大な大地の中に多くの湖沼を有する村である。六ヶ所村においては、近年原子燃料サイクル関連施設の建設をめぐる議論がわき起こっていることはよく知られている。しかし、訪問前に統計資料等を調べて気づいたことは、村の産業の多様性であった。六ヶ所村では、厳しい気候条件と土地条件が重なり、古くは漁業が主産業であった。終戦後開拓が行われ、酪農・畜産をはじめ、根菜を主体とする野菜の生産地としての農業の振興が図られた。しかし1970年代の国家規模の地域開発の波が、むつ小川原港を中心とした臨海工業の拠点地、並びに原子燃料サイクル施設の誘致という形で押し寄せた。エネルギー産業関連で町づくりをはかる地域は日本各地で見られるが、そこには古くからの産業との共存をどのように図るかという問題がある。六ヶ所村はその最たる地域であるが、六ヶ所村での産業の多様さは、村の発展を願う村民の思いの強さを表していると私は考える。

実際の調査について述べると、初めの2日間は全体で六ヶ所村役場で激動の歴史を歩んだ村の変遷と現状についてお話をうかがい、村内に立地する日本原燃株式会社の諸施設、むつ小川原港、石油備蓄基地等を見学させていただいた。また村の文化交流プラザやショッピングモールに足を運び、その洗練された近代的施設を目の当たりにした。3日目からは産業別・テーマ別に分けられた班ごとに、様々な視点から調査を行った。開発を進

める行政側の立場、様々な思いで村の将来を見守る農家や漁家の方々、文化施設を通して村民の交流を図り生活をより良いものに作り上げていく人々の活動…。六ヶ所村巡検報告書には、実際に村を訪れお話をうかがう過程において、六ヶ所村に対する村民の愛情に触れた学生一人一人の思いがまとめられている。一読を願いたい次第である。

私が所属したエネルギー問題を扱う班では、主に原子燃料サイクル施設についての調査を行った。巡検を通じて考えさせられたことは、日本または世界のエネルギー事情の深刻さ、その結果としてあげられる原子力発電の必要性、そして原燃あるいは関係者の方々の原子燃料の安全性に対する努力の大きさである。日本の原子力政策は現在大きな転換期を迎え、高速増殖炉あるいはプルサーマル計画は社会的に注目を集めている。昨今めまぐるしく変化する原子政策の最前線の状況について実際に研究や事業にたずさわっている方々からお話をうかがえたことはこの上ない喜びであり、学生という立場にある私達に意義ある機会を与えてくださったことに対し、深くお礼を申し上げたい。

エネルギーの問題は、これからの人類が大きく直面する問題である。原子燃料開発の中心を担う六ヶ所村は、これからさらに世界中の注目を浴びると考えられる。その役割を足場に、そして幅広い産業が基盤となり、青森県がこれから大いに発展することを願っている。また私達が初めてのフィールドワークを通して勉強させていただいた地域調査の意義を、これからの研究に生かしていきたいと考えている。